

幼児期のことばの発達の

基礎知識

年末年始、子ども達もクリスマスが去ればお正月と、慌ただしくも楽しい冬休みを過ごしていることと思います。お年始の最中、久しぶりに会ったおじいちゃんおばあちゃんや、親戚のおじさんおばさんに、我が子は新年のご挨拶をちゃんと言えただろうか、お年玉をもらったらお礼をちゃんと

言ったのだろうか、お父さんお母さんにとつては気が休まらない、お正月にはそんな場面もあるのではないだろうか。

ことばの発達の最中にある小さな子どもに向けられた、一連の「決まりのことば」や「ごあいさつ」に対する周囲の大人のまなざしは、保護者にとつてもあまり居心地のよいものではありません。いつもならゆつくり待てる我が子のことばも、そんな時はつい、「ほら、ちゃんと言いなさい！」と急かしてしまふ、すると余計に言えなくなってしまう、そうやって悪循環の堂々巡りに陥ることもあります。

「みんなのこぼれ」は氷山の一角

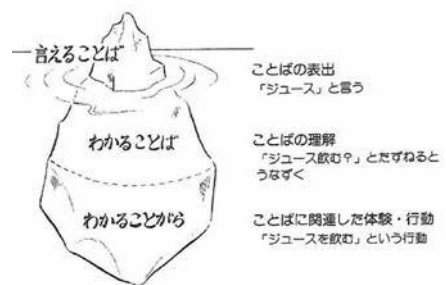
前号（11月号）では、幼児期のこと

ばの発達の基本事項である「ことばの三本柱」について説明しました。ことばの発達の法則は、まずは「わかることば」が発達し、その後に「言えることば」が発達する、その土台に「通じ合う心」があるということです。

お正月に祖父母や親戚が、ことばが遅い我が子に「この子はまだしゃべらんとか？」と問われ、「もつと話しかけなさい」とか、「ちゃんと教えなさい」とか、「ことばをいかにして言わせるか」を基準にアドバイスを受けたか、あまり効果はありません。

「言えることば」は、ことばの発達全体から見れば「氷山の一角」であり、水面下に隠れた基礎の部分が発達しなければ言えるようにはなりません。例えば音声で「ジュース」と言えるようになる前には、「ジュース」のことばが理解できること、その前には生活体験を通し、「ジュース」を「飲む」行動がわかること、そのような下部からの積み重ねが完了した証として「ジュース」と言えるようになります。「わかることば」が蓄えられると、おおかた自然と「言

えることば」が増えていきます。



「みんなのこぼれ」に必要な口腔機能

正しい発音で明瞭に話すために必要な口腔機能の発達は、赤ちゃんの食べる機能の発達と連動します。適切な時期に哺乳から離乳食に移行することや、発達段階に合わせた食器を用いて、処理可能な硬さの離乳食を食べることで、発音に必要な運動機能を習得することにつながります。逆に、不適切な離乳食の経験は、舌や顎、唇の運動発達を阻害し、先々発音のしづらさの要因になることがあります。離乳期は、初期・中期・後期・完了期に分かれますが、誕生日を迎える頃の離乳後期には、大人の「咀嚼」に近い動きができるようになるため、一気に「大人と同じメニュー」にしがちです。ただ、奥歯は1歳半から生え

始め、3歳頃にやっと生え揃うため、それ以前に大人と同じメニューになると、噛みづらい食材を「丸飲み」するクセがつくことがあります。あまり噛まずに飲み込む習慣は、歯並びや噛み合わせにも影響し、発音不明瞭の要因となる可能性もあります。

「みんなのこぼれ」を増やす「聞いたくなる」環境

子どものことばが遅いとつい、大人は正しく言わせようと思いが、話す準備が整っていない子どもにとつて、それはとてもストレスになります。大人のペースで「言わせる」のではなく、大人は子どもの「良い聞き手」となることが重要です。「良い聞き手」とは、子どもが自分の意思を、ことば、身振り、表情などで表現しやすくなるよう導く役割です。次回は、「良い聞き手」について説明したいと思います。



文書寄贈 NPO法人こころコミュニケーションの発達支援